

# 仏陀の求道・伝道について

山口 恵 照

ここに仏陀の求道・伝道というのは、まず「仏伝」によって釈尊の事蹟として知られているものを云う。仏伝によると、釈尊は二十九歳にして迦毘羅城を出立し、修行に従事すること六年、迦耶の郊外の菩提樹下においてさとりを開き、ベナーレスの郊外鹿野苑において初めて説法・教化に成功し、それ以後、人々を教え導いて四十五年、やがて拘尸那揭羅において教化の縁が尽き、静かに生涯の幕を閉じた。時に八十歳であったと云う。

仏伝における釈尊のこのような事蹟は、今日、成道を中心として種々の脚色・増広されたものがあることはよく知られているが、これは総じて出家をもつて貫かれていると云うことができる。そしてこの出家は釈尊の場合、迦毘羅城を出立する以前、すなわち出城以前の在家を前提とし、釈尊の生涯の後半を意義づけていることが明らかである。出城以前の釈尊は、由緒正しい釈迦族の王家に生れ、王位を継ぐ皇太子として生活にめぐまれ、学問に励み、教養を励み、長じて耶輸

陀羅姫を迎えて結婚し、一児羅睺をもつに至ったが、人生の無常を痛感して出家を決意したと云われる。

出家に先立つ在家のこのような事蹟は、釈尊の生涯の全体において、出家と並ぶ深い意義をもっている。それはアーシユラマ(住期)の法によって知ることができるのである。アーシユラマの法とは、人生の究極の理想を解脱と定め、人生の全体を四つに区分して意義づけるもので、学道者(ブラマチャリーン)、家住者(グリハスタ)、林棲者(ヴァーナブラスタ)、遍歴者(サンニャーシン)として伝えられるものである。

人間としてこの世に生まれ、真に立派な大人となるため、学問・修行に従事して幼少青年期を過す(このとき「解脱」が課せられる)。これが学道者の意味するところである。次に、大人となって社会の任務に就くとともに、結婚し家督を相続し、子息を立派に養育し、神々と先祖とに仕える。これが家住者の意味するところで、以上の二アーシユラマが人生の前

半を意義づけるのである。また次に、家住者の任務を果たしたものが進むべき道は、第三の林棲者の道である。これは、家督を子息にゆずり、永遠の生命の課題にとり組むものである。ここでまた新たな学問・修行が開始され、人生後半の意義が發揮されるのである。そしてこの学問・修行を果たしたものが辿る道が、第四の遍歴者の意味するもので、人生の最終コースである。遍歴者とは、万国を遍歴して人々をいつくしみ、老死を超克した無畏の教主として、あらゆる人々から帰依・尊敬されるものを意味するのである。

このようなアーシュラムの法は、インドの法典が今日に至るまで一貫して伝える人類普遍の大道といふべきもので、例えば、『マヌ法典』では、「再生族（アーリヤ文化族）に対しては、ヴェーダによつて規定された清浄なる祭式により、受胎式等の肉体の浄法（サンスカラ）を行ふべきである。この世においても、死後においても罪を浄める」（二・二六）、と云つて、師家入門し、師の家族と起居を俱にしての学問・修行（学道）の進展を重んじて、やがて、自己の務め（ダルム）を果たし、師よりヴェーダの遺産を受けた者は、帰家式をもつて迎えられ、吉祥相ある婦人を娶つて、第二期の家住者となる（三・三一四）。注目すべきは、ここに新妻も浄法を受けることである。「結婚式は婦人のための、ヴェーダの浄法で、男子の入門式に相当する」（二・六七）。また、ここに美しい婦人を尊敬すべきこ

とが説かれており、総じて夫婦の相互敬愛をもつて子孫の繁栄の基礎とするのである（三・五六、三・六〇―六二）。

家住者は結婚式の聖火をもつて、家庭の儀式を行い、堅実な家庭を築くべきであり、ここに祭儀（供儀）が要請される（三・六七以下）。一見、消極的な発想とも受け取られるが、宇宙の本源への帰依、万物への不殺・慈愛の功德を積むことをもつて、家住期の人間の大道たらしめられていると考えられるのである。

さて家住期に住した再生族には林棲期が勧められる。——家住者にして顔に皺より、毛髪が灰色となり、その子に子息を見るに至らば、そのとき、彼は森林に赴くべきである（六・一一二）。この場合、耕作により食物、自身の財産を捨て、その妻を子に託し、あるいはこれを伴う（六・三三）。が要するに、森林において感官を制して定住し（六・四）、牟尼となつて五大祭儀を行い（六・五）、沐浴・布施に従事しつつ、少欲にして満足し、生類を憐憫し（六・八以下）、住处に執著することなく、苦行を修め（六・二二―二七）、樹下に宿り、解脱に意を注がねばならない（六・三二）、と云う。これは、まさしく孤独者の修行といふべきものであり、第四遊行期（遍歴期）の前提である。

遊行期とは次のごときものである。——捨つることなく、捨てられることなき孤独者、解脱の成就ありと知り、常にた

だ独り、成就を求めて、伴侶なく遊行する(六・四二)。また、火もなく家もなく、食物を求めて村に赴くこと、万事に無関心で、意を堅固にして沈黙を守り、「梵に」心を集中すること(六・四三)。これらは遊行者の務めである。そして「施物を受ける」鉢、「住まうべき」樹下、弊衣、伴侶なきこと、および一切への平等心、これらは解脱者の特徴である(六・四四)。解脱を希う遊行者は、感官の抑制(制感)により、貪り・瞋りの滅除により、生類を害しないことにより、不死を得る(六・六〇)。それゆえ、制息(調息)によって罪過を、静思によって罪惡を、制感によって執著を滅却し、静慮の修習により、生類の輪廻を觀るべきである(六・七二―七三)。正しき知見をもつ者は業によって繫縛されることがない。知見なき者は輪廻に陥る(六・七四)。

以上、法典によってアーシュラマの法を辿って見た。人生の全体を四分して意義づけるアーシュラマの教えは、実は釈尊以前、ウパニシャッドにおいて説かれており、ウパニシャッド哲人たちの事蹟を中心として注目に値するものがあるのである。

ウパニシャッド哲人の事蹟は、今日、種々に評価されているが、伝道の観点からとり上げると、仏教と同様に生死を分離することを主題とする説法・教化を特色とすることが明らかである。生死を分離すること、すなわち「出離生死」の間

題は、「不死」の問題である。この問題は、ウパニシャッドの問題意識の中心にはないように見られることがあるけれども、ウパニシャッドの中心問題は出離生死にあり、仏教と同様、不死を課題として説いたのがウパニシャッドの哲人たちであったと云うことができる。この場合、総じて云えば、人間の生死ということとは、衆生(生きとし生けるもの)の生死輪転、つまり、輪廻の問題として、不死ということは、輪廻よりの解放・解脱の問題として提起せられ、この問題の解明のために、ブラフマン(梵)・アートマン(我)の智慧が強調されたのである。

では、どのようにしてブラフマン・アートマンの智慧が強調されたのか? というに、ブラフマン・アートマンを真に知るものは輪廻より自らを解放し、他をして解放させる、と確信してである。そこで、まず、ブラフマン・アートマンが何であるかを知らなければならぬ。この場合、ブラフマン・アートマンはともに正に探求さるべき究極存在なのであるが、これを知るものはバラモン(婆羅門、智者)の中のバラモンとして「ブラフミシュタ」と呼ばれた。ブラフミシュタとは、ブラフマン・アートマンの智慧に達した最高の智者を意味する。

注目すべきは、このようなブラフミシュタを決定する問答論議の対話がジャナカ王の発願によって大きく展開せられた

ことである(『プリハッド・アーンニャカ・ウパニシャッド』三・一一九)。この対話は、まず、ヤージニャヴァルキヤを中心とするバラモンたちの間に開始せられた。アシヴァラをはじめ、八人のバラモンが都合九回にわたってヤージニャヴァルキヤに挑んだ論議は熾烈をきわめ、最後に論議を仕掛けたヴィダグダ・シャーカリヤのごときは、ヤージニャヴァルキヤの問いかけに答えられず、首を墜したと伝えられている。ここに留意すべきは、上記の論議が悉くヤージニャヴァルキヤの勝利に帰し、かれが最高の智者ブラフミシュタであると判明したにかかわらず、ジャナカ王がこの点を首肯しなかったこと、また、このことに対するヤージニャヴァルキヤの態度はまことに適切なものであったこと、である(同四・一一二)。ジャナカ王はすでに当代のバラモンに伍して、ブラフマンの認識に関して相当の域に達していたのである。これは、しかし、ヤージニャヴァルキヤから見れば、「母あり父あり師あるものが言う」底のものであり、真の「ウパニシャッド」(奥義)に達したものでなかった。それゆえ、ヤージニャヴァルキヤはジャナカ王が語ったブラフマンの諸説に対して一々懇切な批評を加え、その結果、遂に王をして自ら語るべきこと無からしめ、弟子としての礼を尽くさしめるにいたったのである。——「ヤージニャヴァルキヤ先生、私は先生に南無(帰依)します。私のために教えを垂れてください」(四・二)。

これは、最初期のウパニシャットにおける師弟の模範的な問柄を偲ばせるところであるが、注目すべきは、このような対話ののち、出離生死の問答が道人ヤージニャヴァルキヤの問いかけをもって展開し、ウパニシャットの伝道が実現したことである。——「王様、あたかも長途の旅行を企てる人は車や船を用意するように、あなたはすでに以上のようなウパニシャッドをもって装備されています。かようなあなたがこの世から解放されるときには、どこへ行かれるのでしょうか?」「先生、私はどこへ行くのか分かりません」「では、王様の行かれるところについてお教え致しましょう」「先生、教えてください」(同上)。

この対話は、単に輪廻をとり上げているのではなくて、輪廻からの解放・解脱を、出離生死(不死)を問題として行っている。留意すべきは、この対話が、バラモンの中のバラモン(ブラフミシュタ)であるヤージニャヴァルキヤとヴィデーハ国を代表する「優婆塞」(清信士)ともいふべきジャナカ王とによって展開され、全人類の解放・解脱のためのブラフマン・アートマンの奥義を確定していることである。この辺の消息はいま具体的に解き尽くし得ないが、対話を結ぶ次の問答からして窺うことができる。——「ジャナカ王よ、王様はすでに無畏を獲られたのです」「ヤージニャヴァルキヤ先生、われらに無畏を説かれた先生にも、無畏が来ますよう

に。先生に帰依します。ここに、ヴィデーハ国民と私は貴命を待つものであります」(同四・四・二五)。

ウパニシャッドの奥義はこのようにして、無畏の法とともに、ヴィデーハ国の「優婆塞」の代表であるジャナカ王に付託せられ、末永く伝えられることになった。ここに「優婆塞」というのは、唐突のようであるが、尊師ウパガフトラト(世尊)から奥義を聞きとどけたのみならず、奥義を付託せられた「随聞者」「随行者」という点から首肯することができるのであろう。

ここに付託せられた奥義は、現前し直証されるブラフマン、すなわち、万物に内在し万物を制御する不滅のアートマンこそは、あなたのアートマンにはかならない(同三・四・一)、というものであるが、ここに不滅の主体が開示されている。そしてこの不滅の主体は不可得、不可壊、無着、無縛であり、善業・悪業によって染着されず、無畏の徳を具え、ただ否定の言明(ネーティ・ネーティ)をもつて確認するほかはない(同四・四・二四―二五)、と云う。ここに注目すべきは、この否定の言明が托鉢(比丘行)に従事する道人にとつて不死の教えの心髄である、ということである。この点は、明らかにヤージニャヴァルキヤの愛妻マイトレーイーに付託されている(同四・五・一以下)。——「マイトレーイーよ、私は現在の生活を棄て遍歴(行脚)に出ようと思つていたので、そなたとカーティヤヤーニーとのために財産の処分をしてお

きたいと思う」「あなた様、この大地が私のために財宝で満たされたとして、それで私は不死となれるのでしょうか？

それとも駄目でしょうか？」「それは駄目だ。金満家たちのような生活ができるというだけだ。不死は金銭で買える見込みがない」「私が不死となるのに役立たないようなものを頂いてもつまりません。あなた様のお悟りになったことを私に教えてください」「そなたは私の恋人房だが、可愛さが今さらにつのつて来た。さあ、そなたよ、私はここで委しく話すから、よく聞きなさい」。

右の対話は、ジャナカ王との対話とは異なった新たな事態を示している。すなわち、ヤージニャヴァルキヤにおいては、いまや在家の生活から訣別し遍歴者として新たな生活に入る門出が、万人のために不死の扉を開く所以になっていること、しかも、恩愛の絆の断ち難いマイトレーイー(弥勒)夫人がまさしく教化されるべきものであること、いわば「所化の正機」となっていること、これらが注目せられる。要するに、人類普遍の法であるアーシユラマの完成を全人類にアピールしているのである。

ここに、仏陀の先蹤を見ることでできよう。

〔付記〕 紙幅の都合上、註記は最少限にとどめた。

△キーワード▽ 求道、伝道、仏陀、ウァーナプラスタ、サンニヤーン

(大阪大学名誉教授)